

最近とても気になる人物がいる。松永安左工門（長崎県 壱岐生まれ、一八七五—一九七一年）である。「電力の鬼」と呼ばれたことで大変有名な経営者で、晩年は茶の湯に夢中になり松永耳庵と名乗った。四十代で女性に、五十代で登山に、そして六十代で茶目であった。また、右手に野蛮な細長い木刀を持っているのに、左手には上品なバッグを持っていた。黒いキモノに焦げ茶色の羽織を袴に着こなしているのに、首には無造作に巻かれただいたい色のマフラー。長身。白髪に白まゆ毛。凛とした優しい目力だ。若い井戸茶碗「有楽」を競り落したり、茶の湯を知らない人には巨大な耳かきにしか見えない竹製の棒、茶杓を数千万円で落札したり。破天荒である。そうかと思えば、せっかく手に入れた名物に執着せずあつけなく寄付してしまう。お点前の手順もめちゃくちゃ。だがまじめにお茶を点てているひたむきな姿が人の心を打つ。「秘すれば花」が女の美学とすれば、「荒ぶる侘び」は男の美学か。

荒ぶる侘び

の湯に夢中になった彼が晩年にたどり着いたのは「荒ぶる侘び」だったのではないか。私が彼に強く興味を示すようになったきっかけは、自叙伝にある一枚の写真であった。九十二歳の松永氏は口をへの字にして強面でにらみつけていた。だがなぜか目は優しい。にらんでいるのに優しい。そこは美男子だったに違いないがそれだけではない。強さと優しさ、野蛮さと上品さが同居するこの写真に、何ともいえない魅力を感じた。電力の鬼と呼ばれた松永氏は戦後、七十一歳のとき、電気事業再編成審議会の会長に選出された。日本経済を支える電力供給に関して、国営で